

— チェルノブイリに想いをよせて —

# ポレーシュ

## 福島のために、今私ができること

2011年3月。東日本大震災が起きてまもなく、私は南相馬から長野に避難してきました。あれから6年半。「長野にいても何かできることはないだろうか」と考え、故郷、南相馬への想いをまとめ、今年8月に行われた全国総文祭弁論部門へ出場しました。緊張しましたが、心を込めて発表することができ、優秀賞を受賞しました。

そして9月23日、私は、南相馬でボランティアの皆さんとともに、菜の花の種まき会に参加してきました。小さな種を蒔き、その上を自分で踏みながら進むのですが、わからないことは大人の方が優しく教えてください、無事に蒔き終えることができました。私の他に高校生の参加もあり、その後の交流会では小学校時代の友人と久しぶりに再会したり、滋賀県八日市南高校のみなさんと仲良くなっている話をしました。また、相馬農業高校の活動報告で、油菜ちゃんについて詳しく知ることができ、私の中で「油菜ちゃんを多くの人々に知ってもらいたい」という気持ちが大きくなりました。たくさんの人たちと出会い、いろいろなお話を聞き、とても貴重な経験ができました。この経験をもとに、これからも「福島のために、今私ができること」に取り組んで行きたいと思います。（注：P6～P7に、弁論大会の発表を全文掲載しました。）

長野県下伊那農業高等学校 古内 舞桜

<福島民報(2017.09.23)より>



〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 ST プラザ鶴舞5階B

**NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部**

銀 行 名：三菱東京 UFJ 銀行 高畠支店(店番号 297)

座 番 号：普通 1682863

座 名 義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵 便 振 替：00880-7-108610

T E L / F a x : 052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホーメページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

## 南相馬便り

(神谷 俊尚)

★9月23日、曇り空の中「菜種種まき会2017」を開催しました。相馬農業高校・八日市南高校・下伊那農業高校から36名の高校生が集い、総勢130名を超える参加者が、原町区萱浜地区の圃場約1haに種を播きました。雨上がりの水田に手際よく手まきを行い、後ろから踏みつけ鎮圧していく手順で、列を組んで行われました。昼食・交流会は、太田生涯学習センターに会場を移し、「油菜ちゃん」「油菜マヨ」「油菜ドレッシング」を使用した、再生協議会女性群の手料理を堪能しながら進められました。3高校は別室で、高校生同士の意見交換会を行い、八日市南高校生の楽器演奏も行われ、中間テスト中にもかかわらず、和やかな交流会となりました。

一般参加者の交流会は、昼食後半に「全国菜の花サミットin南相馬」の報告ビデオを観賞した後開かれ、今年初めて18名で参加した福島市内の企業からは、「電気トランスで大量の菜種油を使っているが、すべて輸入商品。福島で菜種がこれほど大掛かりに栽培されることを知らなかった。今後、福島復興に向けて少しでも寄与できれば…と考えている」、県農業総合センターの参加者からは、「南相馬での菜種栽培は、全国でも屈指の産地になり注目されている。その為にも、栽培技術を磨き、収量増に向けた努力を続けて欲しい。県農業総合センターも応援する」等々の激励があり、和氣あいあいで終了しました。

★懸案であった搾油所開設は、ようやく全体の方向性がまとまり、9月に入り急速に進んでいます。市から借用中の信田沢工業団地の部屋の大改修を行い、食品衛生法に合致する搾油所開設に向け、建築会社と打合せて見積り徴集に入りました。開設目標は11月下旬です。今年度はテスト搾油を繰返し、新年度からの本格稼働を目指していきます。

★とどけ鳥事務所は、大きな変化はありませんが、持込まれる検体の測定を、黙々とボラ

ンティアの皆さまがこなしてくれています。そろそろ、「秋の味覚」が持ち込まれつつあります。相変わらずこの類は汚染度がまだ高く、1万Bq/kg超えが出てきますし、4~5千Bq/kgも普通に検出されています。ウクライナのきのこ類と同じく、今後数十年にわたり食する事はできない現状と思われ、益々長期的にとどけ鳥運営継続の必要性を感じさせられます。

★10月14~15日と21~22日に、第14期南相馬市・第10期浪江町の測定が行われます。9月末、ようやく全国・地元の測定隊メンバーが揃い、本格的に準備に入りました。9月下旬に、浪江町から川俣町そして福島市に通じる国道114号線の通行が可能になりました(ただし、現在も高線量地域であり、私たちは通行に反対です)。

国道の旧検問所から川俣町まで、道路両サイド88ヶ所が封鎖された為、測定作業に大きな障害がでる事が予想されます。役場担当者と話しても、国の直轄なのでらちが明かず、測定しながら問題を克服するしかありません。浪江町測定は大幅に遅れが発生するにせよ、完遂したいと準備しています。

★2011年4月中旬に、チャル救として、東日本大震災に伴う福島第1原発事故への関わりを模索した結果、南相馬市内での活動を開始しました。以来6年半が経過し、とどけ鳥や南相馬農地再生協議会の皆さんとの交わりも深まりつつあります。気が付けば南相馬担当として、現地の皆様方ととどけ鳥事務所を維持し、農家の皆さんと南相馬農地再生協議会を立ち上げ、「油菜ちゃん」誕生のさやかなお手伝いもさせていただきました。これもひとえに、チャル救を支援していただく皆様方のご協力の賜物と、感謝申し上げます。

私は9月末で南相馬を離れ、神野英樹さんにバトンを引き継ぎます。今後とも南相馬へのご支援を心からお願い申し上げます。

長期にわたる、ご指導・ご鞭撻、本当にありがとうございました。



## クリスマスカードキャンペーン始まる!!

### 2017年度インターンの山下です！！



初めましてみなさん!! 名古屋 NGO センターの研修の一環で、8月からインターンをしている山下達矢です。少し自己紹介させていただきます。

高校までは空手、大学ではボクシングを経験、しかし気は小さくて読書が趣味という、異色のインターンです!! (笑)

大学のゼミで、社会問題や NPO について研究しています。今までは、子育て支援をしている NPO にも行きましたし、ゼミでもいろんな団体にヒアリングに行ったりして、いろいろと経験させてもらっています。将来は NPO か NGO で働きたいなと思っています。すごいでしょ!! (笑) インターンを初めて 3 か月ほど経ちましたが、スタッフの方はとても気さくな方ばかりで、楽しくリラックスしながら業務に取り組んでいますよ。具体的にはクリスマスカードキャンペーンに取り組んでいます!!

カードキャンペーンでは、皆様から書いていただいたクリスマスカードを預かり、 Chernobyl のあるウクライナ、そして福島の子ども達へ発送します。 Chernobyl ・福島の原発事故の影響は、当事者にとっては終わった問題ではありません。病気を患い、家族を失った悲しみを持つ人々がいます。そういう人々への心の支援が、この事業の目的です。

昨日は、教会へお伺いしました。毎年ご参加いただいている団体様で、今年もご協力いただくこととなりました。また先日は、企業様からもご連絡があり、今後お話を進めていく予定です。こうやって業務に取り組んでいると、活動にはやはり、周りとのつながりだったり信頼関係だったりが大切だと実感します。子ども達が描いたクリスマスカードは、とてもかわいくて、力作ばかりですよ!! 心がほっこりします!!



### ワールドコラボフェスタへのご招待!!

〈10月14日(土) 10時～18時 名古屋栄 オアシス21にて〉

皆さんにも、ぜひご参加いただきたい企画があります!! 每年10月、オアシス21で開催されるワールドコラボフェスタです!! 当日、私たちの展示ブースでは、来ていただいた方に Chernobyl や福島の現状についてお話しします。もちろん、クリスマスカードも描いていただけますよ!! 文具も紙も全部準備しているので、子連れの方、私たちの支援にご興味のある方は、ぜひぜひご参加ください。お会いできることを楽しみに待っています。



ちなみに、ワールドコラボフェスタでは、テントごとにいろんな国際協力団体が、活動内容や支援先の紹介をしています。普段は知る事のない情報に、接することのできる良い機会かと思います!! 毎年2万人以上来場者がありとても人気のイベントです!!

# ウクライナ派遣 2017 に向けて

(戸村 京子)

来る 10 月 10 日～19 日、2018 年度のチェルノブイリ支援に関して、ウクライナの「チェルノブイリの人質（ホステージ）」基金と話し合うために、チェル救の原 富男（理事長）と戸村 京子（理事）が代表団として訪ウし、また京都の NGO 「JIPPO（ジッポー）」の常務理事 中村尚司さんが自費参加されます。中村さんは、去る 6 月まで南相馬・農地再生協議会の監査を務められ、福島の支援の他、長年スリランカ・東チモール等への国際協力に尽力されています。

今回の訪問では、現在チェル救が皆様にご協力を呼びかけている“事故処理作業者支援キャンペーン”の「チェルノブイリの消防士」基金・「リクビダートル」基金などの団体や行政関係者の方々に、会員の生活状況や健康問題などについて、聞き取りを予定しています。

また、これまで「チェルノブイリ／フクシマ講座」で、チェルノブイリの母親たちの手紙を読む交流会を行ってきましたが、いよいよ 2018 年 2 月にウクライナの母親を招聘することになりました!! お招きするのは、あのチェル救パンフレットの写真でおなじみのアヌーシカちゃんのお母さん、エカテリーナ・ボウクンさん。

以前『ポレーシュ』でもご紹介しましたが、“アヌーシカちゃん”も今は男の子のママです。

南相馬市小高区での講演会を皮切りに、伊那や名古屋でも講演会・交流会を行います。

エカテリーナさんに、チェルノブイリ事故から 31 年をどの様に生きてきたのか、その想いなどをお話していただきます。

現在準備を始めていますが、訪ウ中に詳細について打ち合わせを行ってきます。どうぞ、ご期待ください!

## ちいさな黄色い手紙プロジェクト

### 展覧会報告とウクライナ訪問

（豊橋創造大学短期大学部 幼児教育・保育科 加藤 克俊）

6 月 19 日～7 月 23 日、豊橋創造大学にて「ちいさな黄色い手紙展」を開催しました。本展は「ちいさな黄色い手紙プロジェクト」の一環で、豊橋の明照保育園の子どもの絵を中心 に、菜の花を描いた作品を展示しました。11 月 4 日～23 日までは福島県立博物館、12 月 12 日からはジトミール青少年芸術センターを巡回します。これら一連の活動は、豊橋市を起点として、子ども達の作品によって交流の輪を広げ、原発事故による被災地をつなげます。そして、チェルノブイリ救援・中部が手掛ける「菜の花プロジェクト」を広報し、菜の花の知られざる作用を啓蒙します。

また福島では、会津大学短期大学部 葉山先生の協力により、会津若松に避難している大熊町の子どもの作品が追加され、18 日には同会場にて、蓄光塗料を使ったプラネタリウムをつくるワークショップが開催されます。ジトミールでも、現地の子どもの作品が追加展示される予定となつてあり、葉山先生と共に訪問し、初日（12 月 12 日）にオープニングセレモニーとワークショップが予定されています。日本から届ける作品は、約 130 作品にも及ぶため、ナロジチ地区の幼稚園とオブルチ地区の小学校にも分配展示をする予定です。12 月 13 日に各施設を訪問し、それぞれオープニングセレモニーと小学校ではワークショップを行い、14 日に事故処理作業者の日のセレモニーに出席をし、帰国する予定です。

文化を交流させることは、心に豊かさをもたらします。特に子どもにはそうあってほしいと願います。ウクライナにおける日本の年に、このようなプロジェクトをさせていただけることを心よりうれしく思っています。



<ちいさな黄色い手紙展>

# 能力強化研修「WEB・SNS 活用プログラム」に参加して (兼松 真梨子)

このたび、WEB 広報のためのスキルを磨くため、6月半ばから約3か月にわたって全6回の研修に参加してきました。

なぜこの研修に参加しようと思ったかというと、新しい会員さんを増やすために、今まで情報が届いていない人たちにも、私たちの活動を知ってもらいたいと思ったからです。特に若い人たちに想いを届けたいと思いました。そのためには何ができるだろうか、とずっと考えてきたのですが、やはりネット世代の若者を取り込むには、もう少しネット発信を増やしていくかなくてはいけないと、常日頃思っていました。

しかし、限られた時間と人手で、ノウハウのない私たちには手がつけられませんでした。そんな時、この研修を知り、しかもチームでの参加を推奨していたので、私だけでなく他のメンバーも一緒に WEB 広報について考えてもらう、よい機会になると思い参加を決めました。5回の座学と視察1回の研修はハードでしたが、戦略を立てながら実行し、効果を測定し、その結果をうけてまたプランを練り直す、この PDCA (プラン・ドゥ・チェック・アクション) サイクルを回すことが WEB マーケティングの重要なポイントだと、実践的に学ぶことができました。

また、WEB 広報のために無料で活用できるものもたくさんあると知り、早速研修の課題としてひとつ WEB ページを制作することにしました。題して「油菜ちゃん誕生物語」。これは、油菜ちゃんの紹介と、その背景にある「菜の花プロジェクト」を紹介するものです。

「原発」や「放射能」「 Chernobyl」といったワードは、若者をキャッチするには少々重いテーマだと指摘をうけ、油菜ちゃんや商品開発に携わった相馬農高生などをクローズアップしました。油菜ちゃんを通して私たちの活動を知ってもらうのが狙いでです。

まだまだこれから、関係者の声を載せたり、

河田さんにもChernobylから福島へのメッセージを書いてもらったりと、内容は充実させていく予定です。皆様もぜひアクセスしてお読みください！ 感想やご意見もお待ちしています。

限られた人手と時間、少ない資金の中で、WEB を上手に活用して、もっともっと私たちの活動や想い、Chernobylと福島のことを見発信しながら、新しい応援団を増やしていきたいと思います。伸びをしそうず、私たちなりの WEB 広報を探っていくつもりです。

どうぞ皆様も、お友達や職場の皆様に広めてください！ ご協力よろしくお願ひします。



【制作したページのトップ画像】

[https://peraichi.com/landing\\_pages/view/yunachan](https://peraichi.com/landing_pages/view/yunachan)  
「油菜ちゃん誕生物語」で検索！

スマホをお持ちの方は、右下の QR コードを読み取ってください。上の「油菜ちゃん誕生物語」の画面が表示されます。

フクシマで生まれたウワサの「油菜ちゃん」が、どのような人々の連携で誕生したのか？をご覧になれます。

どうぞ、フクシマの農家さん（…日本の農業）を支援するために、「油菜ちゃん」を食卓に置いていただけませんか？ あなたが健康になるために、ぜひ！ （美）



# 福島のために、今私ができること

長野県下伊那農業高等学校

園芸クリエイト科 3年 古内 舞桜



実りの秋。一面に広がる黄金色の海。目の前に広がる田んぼの稻穂は頭を垂れ、風が吹く度に波打つように揺れている。そんなのどかで美しい田園風景も、2011年3月11日、東日本大震災によって、私の人生とともに大きく変わりました。

福島県南相馬市にある私の実家は、福島第一原発から約25キロの地点にあり、震災後は一時、緊急時避難準備区域に指定されました。当時は、いすれ帰ってくるつもりで、長野県に避難してきましたが、一旦生活基盤が確立してしまうと、帰りたくても帰れなくなってしまいました。あれから6年半。私は今、下伊那農業高校の3年生となりましたが、故郷福島のことを忘れた日はありません。

2年前、久しぶりに帰省した時、何より衝撃的だったのは、目の前に広がる荒れ果てた農地です。広々とした田んぼも畠もハウスの中も、長い草に覆われてしまい、お米や野菜をたくさん育ていた震災前の景色を思うと、やり場のない怒りや悲しみが込み上げてきました。

農作物を作らない一番の理由は、もちろん放射能の影響です。たとえ作ったとしても、消費者の放射能に対する不安が払拭されていないのが現状です。そしてもう1つは、私のように避難している人が多く、人手が足りないからです。元気や力のある働き盛りの若者よりも、住み慣

れたこの町を離れてくないお年寄りの方が多いのです。

故郷の惨状を目の当たりにした私は、実家の田んぼや畠の草刈りをし、津波で流れてきた瓦礫の片付けを行いました。「もう一度、故郷の田んぼで稻が育つ姿を見たい。夢に見るあの風景を再び蘇らせたい。」という思いが一層強くなりました。そして、まずは自分自身が福島の現状を知らなければと思いました。

調べてみると、南相馬市では、菜の花を栽培して農地の再生を行っているということがわかりました。菜の花は水に溶けた放射性セシウムを吸収しますが、その種から絞った油にはセシウムが移行しないというのです。しかも、その菜種油「油菜ちゃん」のネーミングやパッケージなど、商品開発に携わっているのが相馬農業高校のみなさんだと知り、驚きました。厳しい環境の中で、同じ農業高校生が、地道に一步ずつ前を向いて取り組んでいるのです。そんな姿に、「遠く離れた長野にいる私にも、何かできないだろうか」と考えてみました。

まずは、相馬農業高校のみなさんとの交流です。小学校時代の友人がいることがわかり、活動の様子を聞いたり、4月に南相馬市で開催された「全国菜の花サミット」では、「油菜ちゃん」誕生の過程や現状を知ることができました。

「もう、支援されることとは終わりです。私たち若者が自立しなければなりません。これからは自力で地域の農業再生を行うのです」という彼らのメッセージには、前向きな力強い決意をひしひしと感じました。

さらに、新たな出会いがありました。「菜の花プロジェクト」で南相馬を支援されているNPO法人「チャルノブイリ救援・中部」の皆さんです。理事長の原さんが、長野県内で活動されていると知り、事情を説明すると、メンバーの方々が、詳しいデータを元に現在の南相馬の様子を教えてくださったのです。実際の放射線量率マップを見て、実家近くの空間線量が下がっていることに、少し安心しましたが、場所に

よってはまだ地中に放射性物質が存在することもわかり、目に見えない敵との戦いはこれからも続くという現実を実感しました。また、その際に菜種油の「油菜ちゃん」やドレッシングなどを初めて手に取って見ることができ、かわいらしいパッケージのデザインと、黄金色に輝く菜種油は、未来を照らす光のように輝いて見えました。

その後も、理事の神野さんが、本校生徒が商品開発に携わった調理みそ「漬ガール」と私の手紙を、相馬農業高校に直接届けてくださいました。福島に関わる報道が少なくなり、世間の関心が低くなる中、長野と南相馬の架け橋となり、ここまで力を貸してくださる方がいると思うと、本当に心強く、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

高校生活あと半年余り。残された時間の中で、少しでも福島の方々の自立につながる活動をしたい。秋には南相馬で種蒔きをし、文化祭では「油菜ちゃん」の販売を通して、校内はもちろん、地域のみなさんにも福島で頑張っている人達がいることを知ってもらいたい。そう強く思うのです。

私たちの力は微力ではありますが、無力ではありません。私は、これからも自分ができることに精いっぱい取り組んでいきます。いつの日か故郷の地に黄色い菜の花畠が広がり、黄金色の稻穂の海が広がる光景が復活する日を夢見て…。



<「種まき会」前列左から4人目が古内さん>

## 菜の花種まき会に参加して

下伊那農業高校教諭 中島かおる

私と福島との接点は、自分のクラスに南相馬から避難してきた生徒が入学してきたところから始まりました。「長野にいても福島のために何かしたい。」という彼女の思いを実現するため、身近でできることを模索している時に出会ったのが、救援・中部の皆さんでした。

理事長の原さんが住む南箕輪を訪れたのが5月。そして今回、伊那谷親子リフレッシュプロジェクトの皆さんに同行させていただき、南相馬を訪問しました。

当日は、各地から一般の方々や相馬農業高校・八日市南高校のみなさんと一緒に、菜の花の小さな種を蒔き、土を被せながら一歩一歩踏みしめて進みました。海岸近くの圃場は、津波により多くの犠牲者が出ていた場所だとお聞きしましたが、そんな場所に来春には黄色い菜の花畠が広がる光景を夢見て、見ず知らずの人々がともに汗を流し、同じ思いで皆が一つに繋がったという一体感を感じることができました。

また、近隣の様子を案内していただきましたが、避難解除になってもなかなか住民が戻れない浪江町の現状をこの目で見て、放射線量の違いで復興の進み具合が随分と異なる現実を知りました。一方、夕方になると、小高にある双葉屋旅館の食堂には、地元の方やボランティアなど様々な人が集ってきました。

これから街づくりについてアイディアを出し合いながら活発に語り合う姿が、まるで家族のようで、絆の強さと前に向かうエネルギーをひしひしと感じました。

あの震災がなければ…と思うと同時に、震災がなければ繋がることのなかつた縁があることも事実です。我々人間の力は微力ではあっても無力ではないことを実感した3日間でした。

## 「たねまきマルシェ」と 「福島コットンカフェ」 ～被災地と共に歩む～

名古屋生活クラブ たねまきの会 森田雄二

2017年10月21日、岡崎市勤労文化センターにて、「名古屋生活クラブたねまきの会」主催のマルシェを開催します。“未来に種をまく”という意味で「たねまきマルシェ」と名付け、約30のブース出展を予定しています。東日本大震災・熊本地震被災地の支援の意味も込めたマルシェです。 Chernobyl 救援・中部さんも油菜ちゃん関連の商品をPRしていただきまます。

「たねまきマルシェ」と同時開催の「福島コットンカフェ」は、被災地支援カフェと名うつて毎年開催し、今年で3年目となるイベントです。

今回お招きする福島県二本松市在住の藤倉紀美子さんは、震災後、野菜づくりを断念し、夫婦で国産綿花栽培を始め、自家製のオーガニックコットンから、手紡ぎ・手織りの綿製品づくりをしています。また地元福島で、絵本の読み聞かせや糸紡ぎ体験・綿人形作りなど、子ども達に向けさまざまなイベントを行っている方です。

「福島の子ども達でさえ、東日本大震災のことを知らない子どもが増えてきた。これからのお子様に伝える活動を続けたい。それが私の使命だと思うんです」と藤倉さんは言います。

当日は藤倉さんによる絵本の読み聞かせはもちろん、ブースではマフラー・絵本・綿人形の販売のほか、糸車と綿繰り機という昔ながらの道具を使って糸を紡ぐ体験ができます。綿繰り機は綿と種を外す道具で、毎回子ども達に大好評で行列になります。トークショーでは藤倉さんの想いをお聞きします。綿栽培のこと、糸を紡ぐということ、震災のこと、放射能のこと、藤倉さんと一緒に考えませんか？

## 南相馬市の親子28名を迎え 伊那谷親子リフレッシュツアーバーを行いました。(原 富男)

7月22日から3

泊4日の日程で、

「伊那谷親子リフ

レッシュツアーバー」を

行いました。南相馬

市から28名の親子

(子ども16名、大人12名)の参加がありました。

### 【子ども達の感想】

★一番楽しかったのはカヌー体験と「おやき」作り。カヌーも「おやき」作りも初めてだったけれど、上手にできたので楽しかった。

★温泉がよかったです。毎日違う温泉に行ったから。

### 【ご家族の感想】

★のどかな場所で、子ども達も伸び伸び過ごせました。

★何も考えずに安心な野菜を食べられるという事の幸せを実感しました。

★安全な水で水遊びできる子どもたちの顔が絶品でした。

★南相馬では、海にも入れず河でも遊べず水遊びができずにいましたが、こちらでは何の心配もなく自由に遊ばせることができました。こんな機会はありませんので、次回も参加できればと思います。

### \*今年のツアーバーは、2つの問題が残った

一つは、ボランティアの集まりが悪く、直前まで呼びかけなければならなかったこと。もう一つは、助成金が直前に受けられなくなるという事態となったこと。特に助成金問題は「南相馬⇒伊那往復のバス代40万円」が消えてしまい、愕然としました。しかし、長谷溝口地区の皆さんには、今年も溝友館の利用・「イワナ掴み」やバーベキュー等に招待してくださり、地域ぐるみの応援に感謝したいと思います。また、野菜・米・食材・カンパなどを大勢の方にいただきました。ここにお礼を申し上げます。



## 保養スタッフの南相馬市訪問交流ツアーリポート



9月22日～24日、「南相馬市訪問ツアー」を行いました。これは、毎年伊那市で行われている「親子リフレッシュツアー」のスタッフとボランティアが、南相馬市を訪れ、子ども達のおかれている情況を知るための企画です。伊那からの参加者は7名でした。

一日目は、保養の南相馬側の窓口「子どものつばさ」の西代表とスタッフの佐藤さんから、子ども達のおかれている状態や保養の実施状況を伺いました。今年の保養希望数は 650 名ありましたが、受入数は 450 名、200 名が参加できなかつたそうです。子どもの 25% は、事故後 4 回避難と引っ越しを経験し、3 世代同居していた家族もバラバラになり、転校により学力に自信がない子どもが増えているということでした。また、外遊びができないため、幼児の頃の経験不足が色々な面で出ているそうです。

このような事情から保養の希望は多く、「ことものつばさ」では、南相馬市・教育委員会・PTAと協力して、保養の募集をしています。このような連携による保養募集は、南相馬市独自のものです。この方式は参加しやすく、受け入れやすいという特長があり、他の自治体にも広がって欲しい方法です。

二日目は、農地再生協議会主催の「種まき会」に参加しました。今回は、相馬農業高校・滋賀県の高校・下伊那農業高校が参加し、高校生同士の交流会も行われました。

下伊那農業高校の古内さんは、南相馬でのナタネ栽培とその製品化に相馬農業高校が参画し、

ている事を、長野県高校弁論大会で発表して、最優秀賞を受賞、更に全国大会でも優秀賞を受賞しました。午後4時ごろからは、請戸地区の汚染がれき焼却施設や、浪江の津波被害の様子など視察しました。

夕方、伊那の保養に参加した親子（親 7 名、子ども 6 名）と保養スタッフが一堂に会し、夕食を食べながらの交流会が行われました。後日参加者から次のようなメールが届きました。

\*伊那谷親子リフレッシュプロジェクト 様

先日は、伊那谷の皆様と久しぶりに懇親させていただき、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。皆様とのお話の中で、財源の確保やご自分のお仕事もお忙しい中、毎月集まっていただいて、翌年のための打ち合わせをしていただいているなどのお話を伺いしていると、感謝の気持ちと併せて、改めて、自分たちが多くの人たちに支えられていることが実感でき、とても心強く、これからも頑張ろうという力が湧いてきました。

東日本大震災は、身体的にも精神的にも大変な負担がありましたが、皆様との出会いや心のやすらぎを踏まえると、決して悪いことばかりではないんだなあと思いました。本当にありがとうございます。

当日、南相馬市にお越しいただきました皆様はもちろん、当日はお越しいただけなかつた皆様にもよろしくお伝え願います。

さて、先日こちらにお見えになった際に、南相馬市で菜の花の種まきをしたとお伺いしましたが、本日の新聞（福島民報）にその記事が掲載されておりましたので参考までにお送りいたします。

(P1 参照)

夏の暑い時期も終わり、朝晩の寒暖差が大きくなります。これからもお体に気をつけてください。皆様の益々のご活躍をご期待申し上げます。

福島県南相馬市 佐籐



# 「帰る自由」「留まる自由」「移住の自由」

…私の生きる場所はどこなのか？ 私の生きるところが故郷なのか？

愛知県被災者支援センターボランティア 瀧川 裕康

東日本大震災の東電第一原発の事故が原因で「ふるさと」を追わされた人は、かつて福島県内～県外を併せると10万人を超えた。でも今、国や福島県は無理やりに帰還を促し、その寄り廻として「ふるさと」を想起させています。そこにも分断の意図が読み取れています。今回は「ふるさと」を考え直すことで、今も分断の最中にいる避難者の心を思い、この文章を綴ります。帰るに帰られない原発避難者の心に寄り添い、今ある別天地の生活を全面的に肯定し、「新たな故郷」を作り出す営みに応援の賛歌といたく書き記します。既にその子どもたちは、今の拠点がふるさとになっています。

浪江町商工会の原田氏は、「ふるさとは、自分の生まれ育った浪江町と信じて疑いませんでした。…私は、故郷を生まれ育った自然に求めるのではなく、そこで培われてきた人間関係に求めたいと思うのです。そう思うことによって、これから生き方を、過去の故郷を振り返るのではなく、未来に向かって生きていく柱を得たことになるのではと思います」という文章を、2016（平成28）年7月に綴っています。この言葉をお聞きして、私はたくさんの迷いから抜け出た気がします。

2012（平成24）年12月に書かれた執筆者不詳の『震災日記』という詩（印象深いので私のファイルにとっておいたもの）は、「死んでも故郷へ戻りたい」という、この強い思いという言葉で始まり、「私の生きる場所はどこなのか？」私の生きるところが故郷なのか？」という表現で締めくくられています。この詩は、まだ震災翌年のもので、迷いの真っただ中にあったと察せられますが、前向きなものを感じます。

「ふるさと」といえば、誰もが思い出す「うさぎ追いし彼のやま こぶね釣りし彼のかわ…」（尋常小学唱歌）とか、「ふるさとの山はありがたきかな

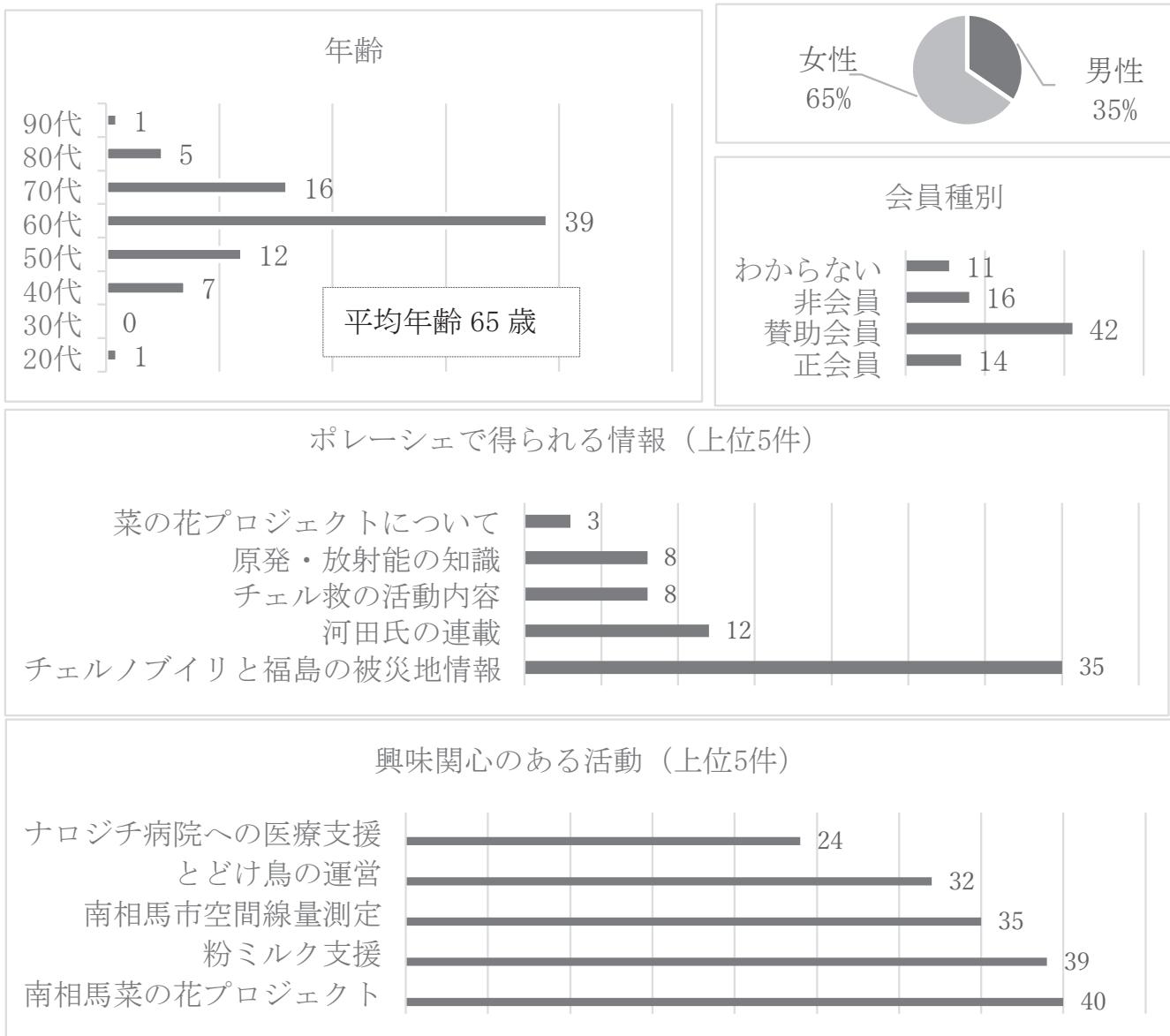
（石川啄木）」という詩でしょうか。その他にも、自然を愛でて故郷を表現する歌は数知れません。ところがこと原発事故に至っては、「自然=ふるさと」という関係を根底から奪います。私たちは、 Chernobyl でも福島でも同じ事象を見てきました。では何を拠り所として生きていくのか、そのことへの問いには東電も福島県も国も、迷いと分断に誘導することであやふやにしてきたと言えます。とは言っても、彼らが何を言おうと、「帰る自由」、「留まる自由」も選択肢として何も悪くありません。問題は福島県は移動先に留まる人の住宅支援を打ち切るのだから、移住を否定することに躍起としか言えません。「原発事故子ども被災者支援法」は、その原点を「帰る自由」、「留まる自由」、「移住の自由」と定めました。「移住の自由」がないがしろにされては困ります。愛知県に避難されている方には、故郷の自然と同じでないかも知れないけど、どうかここに移住してください。移住によって後ろめたいと感じることはありません。愛知県でこれまでに作られた人間関係を重視して、「これから私の生きる場所・故郷」と見定めて、腹をくくって愛知県に今後の希望を見出しませんか？既にご存知のように、愛知県民は優しくて懐が大きく、受け入れるキャパがあると信じます。

愛知県には都会も田舎もあります。どうかご自分の身の丈に合った場所を選んで、堂々と移住を選択してください。貴方のこれまでに築き上げた人間関係を土台とするならば、愛知県は何ものにも代え難い素敵なお郷になるでしょう。

※愛知県の田舎＝三河地方の田舎に移住のお世話をしてくれる所に「おいでん・さんそんセンター」（豊田市足助支所内）があります。興味のある方は、電話0565-62-0610まで。

## 〈ポレーシュ読者アンケートまとめ（実施期間：2017年6月～7月末）〉

回答 83 件（郵便 66 件、WEB9 件、FAX4 件、手渡し 3 件、メール 1 件）／配布 460 件



アンケートに、全国からお声を寄せてくださいり感謝申し上げます。

皆様のメッセージを読んでチエル救の歴史を感じました。ここにすべての結果を載せることはできませんが、今回の結果からみえてきた課題としては、

- ① 20 代 30 代の支援者が少ない
- ② 会員制度の認知不足（活動に参加できなくても賛助会員になれます！）
- ③ 福島支援への関心が高いにもかかわ

らず、ご寄付につながっていない…等が挙げられます。

今後、息の長い活動を続けていくためにも、特に若い方へのはたらきかけは重要になってくると思います。またご寄付がどのように役立っているのか、資金がどれくらい必要なのか、わかりやすくご報告できるといいなあと感じました。

チエル救の若手として、できることを探っていきたいと思います！（兼松）

## 事務局便り

先日、事務局に 2 つの電話がかかった。お一人は 80 歳、もうお一人は 80 歳近い女性だ。おひとり方は名古屋へ戻ったとのことで、近況報告とエール。もうおひとり方は、エールとお叱り。なぜエル救は若い人を育ててこなかったのだ…と。熱く語られ、厳しいご指摘もあった。お二人とも長い間ずっと私達の活動を支えてきてくださった方々である。

一方、この時期になると、事務所は一気に若返る。研修生がやってくるからだ。大学 4 年の研修生は、何というか、実に自然体で、緊張や力みとは無縁と思われるたたずまい。一が、「僕、空手初段。黒帯。ボクシングもやってました」と、ぼそっとふわんふわんと呟く。仕事への意欲はなかなかのもの。今年も恒例のカード・ミルク 2 つのキャンペーンを担つてもらう。老いも若きも実にありがとうございます。  
(山盛)

### 【アンケートにご協力ありがとうございました。】

たくさんのご意見をいただきました。特に「ポレーシュ」に関わるご指摘を紹介します。  
☆「他の広報誌と比べて興味を引く記事が多くある」「記事ひとつひとつがしっかりと書かれている」「内容がもりだくさん、行動が文になっている」…評価、ありがとうございます。  
★「わがままを言わせていただけるなら、行間をもうちょっとだけ広くしていただけと、読みやすくなるかなって思います」「ページの左から右まで一行で続くので、とても読みにくいです。半分に分けてもらえるとよいかと思うのですが」…他にもたくさん。  
⇒ はい！賜りました。今号から、文字サイズを 11.0 ポイントに大きくし、2 列分割も取り入れました。いかがでしょうか？ 文字数を超えて寄せられた原稿は、できる限り全文掲載したいと考えて、ついつい満載になっていました。今号より、ご意見を念頭に置いて、読みやすさを重点的に考えます。貴重なご意見をありがとうございました。(編集子より)

## 編集後記

☆最寄りの駅のホームから見る夕焼けが好きだったのに、邪魔者 駅近高層マンションが建ってしまった。それからは BEST 夕焼けポイント探しの夕方徘徊が始まった…。  
(佳)  
☆「世代交代」とは言えないなあ。たいして変わらないような気がするのは、私だけ？でも 6 時間かけて毎週通うのは、確かに体力的にも疲弊するよね、K さんお疲れさまでした。  
J さん、体力勝負の覚悟はできてる？ 悠々自適に過ごしているけど、鈍ってない(笑)？  
(美)  
☆人は誰も「あの頃はよかった」と言って今を後悔する。あるいは「あの頃、希望を捨てなくてよかった」と言って今を幸せに生きる。誰もがそんな「あの頃（分岐点）」を持っているが、決して「あの頃」に戻ることはできない。しかし、未来の自分が「あの頃」と言って懐かしむ分岐点は、もしかしたら「今」なのかもしれない。そう考えれば、「今」を生きていることは、またとない絶好のチャンスである。私は、そう信じて「今」を生きている。もう一つ確かなことは、「人は誰も、これから的人生において今が一番若い」ということである。福島も日本もそして世界も、今まさに、大きな「分岐点」に直面している。  
(J)

〒 456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14  
印刷 「エーブリント」  
TEL・FAX (052) 871-9473